

文献センター。設立と活動の経過

奥 沢 邦 成

発 端（一九七〇年九月）

ことの起りは、大阪、尾関弘とぼくとの雑談からであった。その中で「文献センター」が話題となり、尾関君は、つぶさに体験したローザンヌのCIRA（国際アナキズム研究センター）を語り、日本にもCIRA的な研究センターが必要であると力説した。その頃東京に実現するに至らなかった文献センターの企画があり、多少関わりつつその必要性を感じていたぼくにとっても、全く異存はなかった。

センター建設は、しかし容易な仕事ではなく、建設にあたつての好条件は何一つ見当らず、また見通しも正直言つてもてなかった。ただセンターの必要性を確認しただけのことが出来るかを相談しつつまとめられた構想は、概ね次のようであった。とにかく文献や資料を一ヶ所に集め保管していくこと。現在収集できそうな文献類の四散を防ぎ、少しづつでも蓄積していくこと。そのなかで、センター建設の条件が揃い、活動を担う適任者が現われたら、それまでに集まった文献、資料類をもとにして本格的な文献・研究センターとして出発したい。こんな具合であった。

その保管場所としては、かつて文献センターを発案したことが

あり、尾関君の知っている竜さんの名前が候補にあげられた。早速その場で「設立のよびかけ」の草案をつくり、竜さんとの交渉をぼくが担当した。

文献センター（的）構想は、すでにいくつかあった。先に触れた「実現するに至らなかった東京での企画」とは、麦社で計画されていたものである。

——麦社では、各地で刊行されているアナキズム運動の雑誌、リーフレット、新聞、ニュース等々を収集し、相互の交流を促進する文献センターの設立を計画しています。（通信より）

また、石川三四郎の蔵書を中心に文庫をつくろうとする案があったと言う。それぞれ多少のニュアンスの相違はあるが、そこに込められた意図に大差はないと思う。尾関君は、センター設立の意図を『現代のアナキズム運動』の中で次のように述べている。

「五月革命Vに象徴的にみられるように、状況が思想よりはるかに先行している今日、新しい運動を創出する新しい理論と思想の構築は、ヨーロッパのみならず日本においても緊急の課題である。そのためにもCIRAの果たす役割はますます大きくな

っていくだろう。それにしても、そのような重要な仕事は、今のうちに、ミハイロフ夫人をはじめとする少数の個人の、非常な献身によって支えられている状態に、ぼくたちが甘えていていいわけではない。日本に住むぼくが、精一杯彼女の仕事に協力、連帯するためにも、同じような目的をもつ研究センターを日本にもつくることを考えた。

日本に帰ってからしばらく、ぼくはこの夢にとりつかれていたが、最近になってようやく数人の仲間の協力を得て、静岡県の富士宮市にそれを建てることに決った。

最近のように多くのアナキズム関係の本が出版されるようになったのは七一年以降のことであり、その頃は、アナキズムに関連した書籍がきわめて少なく読みたいと思ってもなかなか入手できなかった。文献の多くは、大正、昭和初期の古いものが多く、戦後に出版されたものも我々の欲求を満たすにはあまりにも貧弱であった。そうした状況のもとで、文献類が一通り揃えられ、自由に利用のできる場が望まれたことは当然と言えよう。

また、日本の社会主義思想や運動に関するアナキズムあるいはアナキズム的な立場からの見方や視点の提出、研究といった領域が補強されなければならないといったぼくの個人的立場もあった。麦社の文献センター計画については、空間的に限られた事務所では不可能と考え、周辺の人たちに場所の相談をしたこともあったが、いずれも具体化するには至らなかった。

これまで述べてきたように、尾関君にしても、ぼくにしても、また竜さんにしてもかつてアナ連時代に同様の構想を提出したこ

とがあるというように、センター設立に携わった個人々人は各様にそれぞれの経緯をもっていたと言える。

構想の拡大

竜さんとの交渉のために、翌十月初旬に「ふもとの家」を訪れた。初対面であった

保管の場所といっても、室の一隅をというつもりであったが、竜さんから提案された構想は予想すらしなかった程に大きかった。それは、書庫兼閲覧室として別個に建物をつくるというものであり、現在のセンターの敷地を示された。この段階で、文献センターの構想はふくれあがり、同時に具体性をもち始めた。

そして、竜さんの参加と構想の拡大のもとに十月二十六日付けで「日本アナキズム研究センターの設立について」のアピールが、二百枚程配布された。その後いくつかの問い合わせや寄贈書があったが、反響は別にとりたてるほどのものではなかった。これが、文献センターの出発であった。

センター設立の呼びかけが個人名で、しかも「作りましよう」ではなく、「作ったから協力を」といった形で出されたことは、その段階では全く実態の伴わない言葉だけのもの、いわばデッチ上げに似たものであったにもかかわらず、活動に対する一つの方法、一つの姿勢を示していたように思う。一つには、センターの設立を発起人や準備会を経て何らかの組織形態を整えつつ建設する方法が考えられた。実際にそのような考え方に立つ批判と、意見が寄せられもした。センターを建設し、運営していくためには

広汎な支持が必要であり、また有効であることを考えなかったわけではない。そのように考え、ある時期はその方向を探りもしたが、現実には異った形で建設が進められた。

そこには、実態は伴わなかったとしても、すでに「これでよろう」という意志一致が先行し、既成事実化していた。そして、その事実を超える何ものをも、他に見出せなかったのである。どんなに魅力的な方法であっても、活動の裏付けが得られず、また自分からも確信するに至らない状況では、自分の足本を見つめていくしかない。

また、センター設立の呼びかけの段階で、やれる者がやれる範囲で進めていこうという合意があった。そこには、おそらく他にやる者は居ないであろう、しかし今やっておかなければ出来なくなることもあるし、本格的に開始されるまでの「つなぎ」「土台の一端にでも……」という予測が働いていた。

この考え方は、書庫建設を担った「ばおばぶ」グループの活動においても明確にされた。そこには「形式にこだわらず、実際にやれるものがやれる範囲で進めていく」といった一致点があったと思うし、これはセンターの建設開始から現在までの一貫した活動の型である。

この考え方なり、活動の仕方は、自分たちだけでやるんだといった閉鎖性を含んだものではなく、自分たちに出来るギリギリの所までやり切るしかないとする考え方、他に目を向け依存する活動よりもっと直接的に個々人の課題として向う姿勢として理解したいと思う。

ただし、これが今後の活動を規定するものではない。少なくとも

も現在までの活動においては、以上の考え方なり活動の方法がもっとも有効であった。しかし、文献センターがセンターとしての実質を得るためには、また異った活動の方法をもたなければならぬと思う。

書庫の建設とばおばぶ（一九七一年）

センターの構想の拡大とアピール以後、活動の具体的な手掛りが得られなかったが、翌年二月から「東京自連」のメンバー数名との接触が生まれ、センター設立のための話し合いがもたれ始めた。この集まりが間もなく、センターの建設を目的とした「ばおばぶ」グループとなり、定期的会合、センターの構想の具体化、通信の発行、書庫の建設等に取り組んだ。その主なメンバーは、田村、小林、上村、石坂、佐藤、工藤、山下、奥沢であった。

七、八月の書庫建設にむけた諸活動は、「ばおばぶ」グループが担当し、二度にわたるワーク・キャンプには尾関君と大阪の有志の協力、呼びかけに応じて参加した十余名の参加者を得て、八月に書庫の建設を終えた。作業としては、材木運び、基礎工事、床張り、その他内装を担当し、建前、外装は本職に頼んだ。建設費用二十万余りは竜さんの負担であった。

書庫建設の後、残された内装作業、備品と書籍を東京から運んだり、その整備に追われたりしていたが、同時にセンターの運営を含めた課題が直面する問題として浮びあがってきた。そして運営案もつくられた。しかし、それも意見の一致を得ぬままに、活動は停滞し、翌七二年一月に「ばおばぶ」は活動を停止した。

「ばおばぶ」グループは、書庫を建設しながらも一年余りで解散となった。

すでに書庫の建設に前後して、数名のメンバーがグループから離れていた。その主要な原因、意見の相違は、文献センターをどういうものにするか、どのようなセンターを作っていくのかに関するグループ結成以来の問題にあった。文献センターの内容と構想については、さまざまな意見が出され、提案があり、討論されていたが、書庫建設の日程は結論をまたずに進められた。七月段階になると、この現実の進行と、センターの構想の未確定な状況との断絶から、何人かがグループを離れていった。ぼくはそのようにみている。

細かいニュアンスは別として、グループの解散もその延長に位置するのかもしれない。

文献センターの構想についてグループ内で話されたことは、まず「単なる図書館は作りたくない」という点にあった。そこで表明された個々人の意図はセンターの枠を押し拡げていくものであった。

○ミニ・コミを中心とし、グループ相互の交流を図る。

○情報紙を出していく。

○各地に同様のセンターをつくり、連合する。

○外国との交流の場とする。

こうした提案がなされたのであるが、そこには参加したメンバー個々人の意図とセンターの構想との安直な結びつきがあったことは否めない。しかし同時に、そういった関わり方によってやっと

動き始めたそれ以前の低迷さも指摘されなければならない。

センターの構想は内容豊富となり、同時にあいまいさの中で肥大した。しかし、安易に拡大された構想は現実には直面する過程で限定されざるを得ない。思うままに、現実には動いてくれない。この行き方に対し、つまりセンターに結びつけた形で個々の意図を実現させるのではなく、むしろセンターの機能を明確にし（限定し）、センターの活動に含みにくいものは積極的に分離し、自立した運動として改めてセンターとの関わり、関係、結合を図るよう方向の転換が必要となった。いわば「図書館でいいではないか」といった、ある種の居直りでもあったわけである。

センターはまず図書館の機能をもたなければならぬ。と同時に、それはさまざまな外部、周辺の動きとの関連の中で初めて「単なる図書館」以上のものになり得るといった見方に立つものであった。実際には、段階的に仕事を限定しつつ、積みあげていくことを意味していた。

しかしこの方向の転換が円滑に進められなかった。この点を十分に話しこめなかったこと、その他にも理由を求められるかも知れないが、いずれにしろ「ばおばぶ」は解散するに至った。

センターの維持（一九七二年）

「ばおばぶ」が解散し、本の整理を中心とした作業が細々と続けられることになった。「ばおばぶ」のメンバーが去り、備北、弥栄と共同体の活動に取り組み実質的に参加できなくなった尾関君を除くと、竜さんとぼくの二人でセンターを維持しなくてはならぬ状態であった。

文献類の整理をはじめとするセンター公開の準備作業は、遅々としたものとなり、公開の見通しもつかめないままに集められた書籍の整理が続けられた。でも、孤立してしまっただけではなかった。噂を聞いてセンターを訪れる人がぼつぼつ現われ、整理の仕事を手伝う協力者も出てきた。京都の羽熊君、名古屋から来て近くに住みついた春木君、東京のより子さん、静岡の小坂さん、横浜のアントン君（在メキシコ）といった常連の他に、地味な仕事を手伝ってくれた人たちが、センターに活気を吹きこみ、センターを支えてきた。

こうした状況のもとで、センターの運営および活動に関して次の方針が決められた。

——文献センターの運営は、竜（管理、運営）奥沢（会計、事務）の責任のもとに有志活動者の支援と協力によって運営する。

なお、文献センターの趣旨にそった広範かつ長期的な発展のために相談役を設け、管理運営全般にわたり助言を受ける。（相談役・大沢正道、長谷川進、向井孝）

——諸般の事情、主要には図書文献類の不備と、受け入れ体勢が整わないことのため、二―三年の間は原則として非公開とし、この間アナキズムを軸とした基本文献の収集と整理に全力を集める。

以上が、七二年の八月のキャンプから秋にかけての討議によって決定された。具体的な活動としては、文献の収集と整理、センター通信と報告書の発行、月一回の定例会であった。

書庫が出来、本やその他の資料が少しづつでも増え、人が訪れ

るようになった文献センターは、その運営の困難さを実感として我々に感じさせ始めた。維持という課題をこえてセンター公開の活動に取り組むには、我々はあまりにも無力であった。

こうした実状の中で、先に述べた運営・活動の方針が考え出された。それを一言でいい表わせれば、責任の所在と、実質的に担っていく活動の枠を確認したものといえる。運営については、かつて会員制あるいは委員会制といった意見が出されたが、それまでの活動のパターンであった自主的参加による活動と運営を原則として踏襲した。

一九七三年・夏のキャンプ

新しい運営体勢のもとに、一つのベースが形成され、基本文献の収集と整理の作業を中心にセンターの活動がささやかに続けられた。七三年に入り、文献センターは三年目を迎えた。

四月にもたれたミーティングで、本の整理その他の作業と取り組んでいた人たちから、センターの活動について、また個々人とセンターの活動との関わり方について問題が提起された。問題の一つ一つを正確に記すことは難しい。ただ、センターがどのような条件のもとで、どのように考え活動することによって現在に至っているかについて、新しい参加者との間に没コミュニケーションが生じることだけは避けたいと、多くの意見を聞きながら考えた。本論の意図の出発はここにある。正確な現状把握の一助になれば、と考えている。

童さんにしろ、ぼくにしろ、文献センターに関連した、大きな抱負はもっている。けれど、状況を無視してあまりに大くを語ると

キャンプ報告 (七三年七月)

短い準備期間をしか持ちえなかったのと、情宣活動の不備に一抹の不安を覚えつつも、最低限不断の活動の延長線上にできれば良々と考えつつ7月のキャンプは始まった。

6月30日(土) 準備、打合わせ。

夜、顧問の長谷川進さんにブルードンの話を聞く。

7月1日(日) 作業開始、昼間二名、夜間二名。(夕、大阪のE君来)この日はまず残っていた単行本のカード書き、原簿記入、ラベル貼りを済ませるべく、頑張る。この作業は比較的慣れた作業なので手順は早い。が、明日中に終わるか……。

7月2日(月) 昼間二名、夜間三名。夜羽熊氏来。昨日の仕事の続き。作業手順は慣れたものである。しかし、分類法でつまづく。むずかしい。若干の残りが出る。

7月3日(火) 三名。単行本の整理続行。本日は完了して雑誌、ミニコミ、機関紙・誌に取りかかる。このキャンプの中心課題である。難物中の難物。静岡の小坂さんの整理方法を踏しゅうする。まず、朝日ジャーナルのバック・ナンバー欠号調べ、五冊単位で整本できるものは整本する。67年～69年はよく揃っている。続いて現代の目、月刊キブツ：雑誌類は欠号が多いので、それを書き出し、ヒモでそれぞれまとめ一応の整理を終える。いよいよピラ、リーフの類の段ボール箱に取りかかる。

嘘になる。センターを取りまく状況はいろいろと変ったし、変っていく。その状況のもとで主張し、行動し、出来る限りのことをやっていくしかない。といっても、これを消極的、受動的としか理解されないとしたら、大変に残念である。

一つの重要な問題を忘れていた。それは「ふもとの家」がユースホステルであり、文献センターは別棟ではあるが、その一隅を借りているということである。時々混乱が起こり、竜さんに余計な迷惑をかけることがある。

五月の下旬、半年ぶりに羽熊君がグループ数名でやってきた。今年に入ってから常連となった沼津の中村君、それにぼくが加わってセンターの今後が話され、夏のキャンプが計画された。七月一日から九日まで、ダンボール十余箱につめ込まれているミニ・コミ紙の整理を主眼として立案された。準備期間は短かったが、六月に入ってから中村君とぼくがその準備にとりかかり、向井さんの協力を得て実施された。

まず、(バルタイ系)、アナキズム系、無党派、ノンポリ系大きく大別する。三人でそれぞれ段ボールの中からとり出して分類する。大体そこまでで一日終わり夕刻より自炊の為、山荘へ移動する。本日より自炊開始。夜、ロシア・スラブ。

7月4日(水) 三名。ハトロンの紙を買い求め、ミニコミ類をグループ別に袋につめる。段ボール八箱のものを袋に表書きし、同グループのものを集めて入れてゆくという作業をくり返す。夜、カレーライス。

7月5日(木) 六名。東京より奥沢、戸駒それに平岡さん来る。前日と同内容の作業続行。そろそろ疲労がでてくる。

7月6日(金) 一名。昼間作業を少ししてから、稲子へ行く。離村した部落。暑い。夜、向井孝、竜武一郎、平岡氏を迎え、バーベキュー、ブラスますの鉄板焼を食べる。

7月7日(土) 二四名。三時までセンターの整理を続行し、それより沼津の山鹿文庫へ行く。夜、非暴力直接行動トレーニングを行う。

7月8日(日) 七名。パンフ、ピラ整理続行。今回のキャンプの時は超したが、かなり残りそうである。夜、今回の事について反省と今後の活動計画、当面する課題等について話す。

7月9日(月) 残務整理。

参加人員は延べ六〇名を数えた。仕事は、単行本関係が全て整理完了(一五〇〇冊)。その他のミニコミ、ピラ、パンフの類については、袋に同種のものをソウ入し、

「ツイエオ順」の袋をわけるといふ所まで八〇名終えた。この点に関しては、やっているうちにその整理の方法を発見し、より簡略化しえたということ、即ち整理の方法をある程度確立しえたという点において大きく評価されるべきだろうと思う。従って、当初の過大な計画(全完了)に比しても、七〇〜八〇名の達成をなしえたと言ってよい。

(中村記)